

**【新指定文化財 2件】**

	種 別	文化財の名称	所 在 地	保持団体または管理団体
1	無形文化財 (工芸技術)	越前鳥の子	越前市新在家町8-44	越前生漉鳥の子紙保存会
2	天然記念物	オオキンレイカ群落	高浜町青葉山	高浜町

# 1 越前鳥の子えちぜんとり こ

(1) 技術保持団体 越前きずき生漉鳥の子紙保存会  
会長 柳瀬 晴夫

(2) 所在地 越前市新在家町8-44  
(福井県和紙工業協同組合内)

## (3) 技術の由来・内容

「鳥の子」とは、雁皮がんぴというジンチョウゲ科の植物を材料に漉いた紙で、色が卵の殻に似ていることからその名がある。肌は滑らかで耐久性に優れており、虫害も少ないことから、経典や貴重書等の用紙として愛用されてきた。

越前における鳥の子の起源は不明であるが、室町時代の貴族の日記等には、越前の鳥の子が公家や僧侶の土産物として重宝されていたことが記されており、室町期にはすでに越前の鳥の子の評価は高くなっていたようである。江戸時代になるとその評価はさらに高まり、貞享元年(一六八四)の『雍州府志』には「凡そ加賀奉書越前鳥の子是れをもって紙の最となす」、正徳三年(一七一二)の『和漢三才図会』には「紙の王と呼ぶにふさわしい紙」と記されている。

現在、越前鳥の子は、雁皮の繊維を用いて、「流し漉き」という技法で漉かれる。工程は、①雁皮の採取、②皮こき、③灰汁出し、④煮熟あく しやじゆく、⑤塵よりちり、⑥叩解こうかい、⑦紙漉き、⑧圧搾あつさく、⑨乾燥、⑩仕上げ である。

雁皮は繊維が細かく、塵より等の原料加工に時間がかかるが、手間を惜しまず、各工程の作業が丁寧に行われることで、緻密きめで肌理の細かい美しい風合いの紙が出来上がる。

越前鳥の子の技術保持団体として、越前生漉鳥の子紙保存会を認定する。越前生漉鳥の子紙保存会は平成27年3月27日に設立された団体で、現在、正会員は8名である。保存会は、伝統技法を研究しながら優美で質の高い越前鳥の子を漉くことに専念しており、伝統的な越前鳥の子の製作技術を高度に体得し、かつこれに精通している。

## 越前鳥の子の要件

- 一 原料は雁皮であること。
- 二 伝統的な製法と製紙用具によること。
  - (1) 白皮作業を行い、煮熟にじゆくには草木灰又はソーダ灰を使用すること。
  - (2) 薬品漂白を行わないこと。
  - (3) 叩解こうかいは手打ち又はこれに準じた方法で行うこと。
  - (4) 抄造は「ねり」にとろろあおい又はノリウツギを用い、流し漉きであること。
  - (5) 板干しとし、天日または室むろよる乾燥であること
- 三 伝統的な越前鳥の子の色沢、地合等の性質を保持すること。



①雁皮（敦賀半島にて採取したもの）



④木灰から灰汁を抽出



②雁皮の皮こき



⑤塵選り（塵取り）



③灰汁だし



⑥叩き棒で雁皮の繊維を叩ほぐす



④草木灰で雁皮を煮熟



⑥ビーターにかけて繊維をさらに細かくする



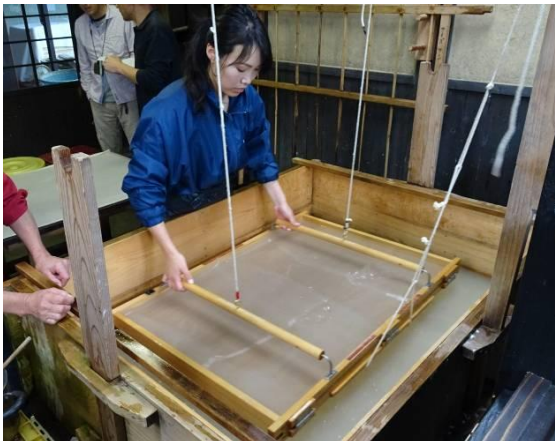
⑦馬鋏で雁皮の繊維を全体に行き渡らせる



⑦紙床板の上に紙を重ねていく



⑦ネリを加えてたて木でたてる



⑦紙料を汲んで紙の層を作っていく



⑦紙料を汲んで紙の層を作っていく

## 2 オオキンレイカ<sup>ぐんらく</sup>群落

- (1) 所在地 高浜町青葉山  
(2) 管理団体 高浜町  
(3) 種類 被子植物  
オミナエシ科

### (4) 由来・特徴

オオキンレイカは、福井県と京都府の境にそびえる青葉山でしか生育が確認されていない日本固有種で、茎の頂きに黄色の小さい花を散房状に多数つける多年草である。草丈は50～100cmの高さになる。葉は、ややかたくて光沢がある長い柄を有し、長さ幅ともに7～16cmでカエデのように掌状に5～7裂し無毛である。花冠は直径4mm前後で5裂し、明らかな距がある。花期は7月下旬～9月中頃である。

オオキンレイカは、かつて青葉山中に多く自生していたが、近年個体数が減少し分布域も縮小している。福井県レッドデータブック（平成16年度発行）において県域絶滅危惧Ⅰ類に指定されており、近い将来における絶滅の危険性が高い種として懸念されている。また、地元住民のオオキンレイカに対する保護意識も高いことなどから、文化財に指定して、その一層の保護を図るものである。

